



マテリアリティ 新たな社会価値の創造

生物多様性の保全

基本的な考え方

三機工業グループは、生物多様性が持続可能な社会にとって重要な基盤であることを認識し、生物多様性の保全に努めることによって、自然と人間が調和しながら共存できる自然共生社会の実現を目指しています。

生物多様性の保全
<https://www.sanki.co.jp/sustainability/environment/biodiversity/2026>

植樹・育樹活動

三機工業グループでは、2010年度から「SANKI YOUエコ貢献ポイント」制度を通じた環境保全活動として植樹・育樹活動支援などを実施しています。全国各地に「SANKI YOUの森」を整備するなど、その土地の植生の多様性を活かした森づくりや豊かな海の恵みにつながる植樹活動などへの支援、従業員参加のボランティア活動など、さまざまな環境保全活動に取り組んでいます。

2025年度は、「SANKI YOUエコ貢献ポイント」制度を通じた環境保全活動への支援として、7団体6プロジェクトに支援を行いました。加えて、各支援先での植樹・育樹のボランティア活動に、当社グループ役員、従業員とその家族のべ221名が参加しました。

2025年5月には、創立100周年を機に「三機の森」「感謝の森」を新生「三機の森」として再整備し、当社グループ役員・従業員の約100名で植樹イベントを開催して苗木約300本を植樹しました。なお、一連の活動は「自社以外が実施する水源涵養に係る支援」として、内閣官房水循環政策本部事務局が定める「水循環ACTIVE企業」に認証されました。



従業員の環境保全活動への参加状況、植樹プロジェクトの支援実績
<https://www.sanki.co.jp/sustainability/environment/biodiversity/2026>

生物多様性に関する取り組み

当社グループは、従来から取り組んでいる植樹・育樹活動に加え、環境省が主導する「生物多様性のための30by30アライアンス※1」に参画し、自然共生サイト※2への支援を実施しています。三機テクノセンター内で地域住民に開放している「三機環境園」や植樹育樹支援先の「めぐりの森」「SANKI YOUの森 くまもと山都」の3カ所が自然共生サイトに登録されています。

加えて、海の生態系を保全するサンゴプロジェクトへの支援も行っています。サンゴ礁は、気候変動等の影響により絶滅の危機に瀕しており、同プロジェクトでは、沖縄県をはじめとする世界中の海でサンゴの植え付けと育成を目指しています。

また、2024年度より新たに、愛知県知多市の天然記念物に指定されている「佐布里梅」の保全活動への支援も行っています。引き続き、さまざまな活動を通して、さらなる環境保全に貢献していきます。



沖縄科学技術大学院大学 (OIST) サンゴプロジェクト

※1 生物多様性のための30by30アライアンス：2030年までに生物多様性の損失を食い止め、回復させるために、陸と海の30%を健全な生態系として効果的に保全する目標
 ※2 自然共生サイト：国が認定する「民間の取り組みによって生物多様性の保全が図られている区域」

三機工業グループ 行動規範・行動指針
<https://www.sanki.co.jp/sustainability/governance/conduct-code/2026>

生物多様性に関する外部イニシアチブへの参画



経団連 生物多様性宣言 イニシアチブ



環境省 生物多様性のための30by30アライアンス



地球環境の未来を見つめるプロジェクト

南極観測事業に人と技術で貢献

三機工業は、南極・昭和基地が建設された1957年に資材

納入用のローラコンベヤ30台を

納入して以来、南極域における環境変動と地球環境システムの解明を目的とした国家事業「南極地域観測事業」にかかわり続けています。1991年の第33次越冬隊には、国立極地研究所に当社従業員が出向する形で初めて隊員を派遣しました。以来2025年の第67次隊まで、当社から国立極地研究所に出向し南極観測に従事した社員は総勢22名にのぼり、現在も第67次隊として佐藤広が活動しています。また1999年には、昭和基地初の污水处理装置の導入に貢献し、運用開始までを当社派遣隊員が担当しました。その後も継続的に技術者を派遣し、昭和基地内の環境保全業務（排水・廃棄物処理施設）や機械設備（空調・衛生設備）の維持管理に加え、污水处理施設の更新や基本観測棟の設備構築にも携わっています。2024年2月には、長年の貢献が評価されて「国立極地研究所 南極観測パートナー企業」に選定されると、2025年・2026年も継続認定されています。今後も南極観測事業への貢献を通じ、「脱炭素社会への貢献」と「エンジニアリングを活かした快適環境の構築」に取り組んでいきます。

提供：国立極地研究所

インフォマーシャル「南極日誌」編



VOICE

美しくも過酷な環境で 当社の技術が活かされています

第66次南極地域観測隊
東海林 貴

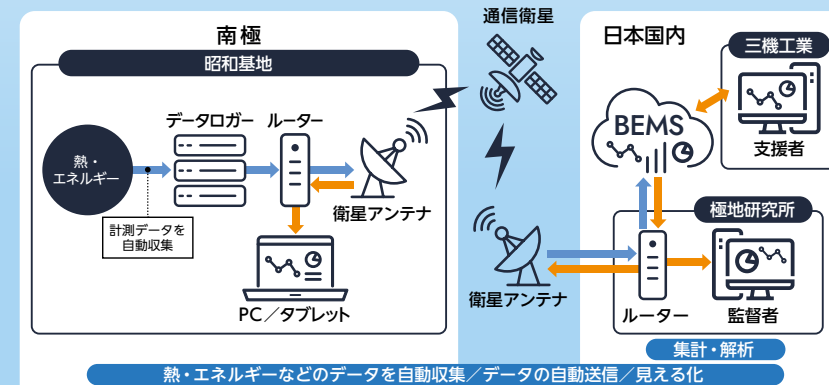
第66次南極地域観測隊の一員として、2024年12月から約1年3カ月にわたって南極・昭和基地に滞在しました。昭和基地での主な任務は、空調・給水・消火設備など、隊員の生活を支えるライフラインの維持管理です。冬は約30人、夏は約100人が活動する基地で、生活基盤を守りつつ、観測の支援も行いました。また特筆すべき任務として、昭和基地のゼロエミッション達成に向けた研究の一環として、居住環境の計測を遠隔にて常時監視・評価できるクラウドBEMSの導入に向け、計測機器を基地内の各所に設置す

るというミッションにも従事しました。

南極は美しくも過酷な環境ですが、基地での生活は想像以上に快適でした。それは当社が培ってきた技術とノウハウが活かされているためです。とはいえ、南極では計画通りにいかないことが当たり

前です。思い通りにしようとするのではなく最善を探し続けることの重要性、そして一人では生きられない環境の中で人との関係性の大切さを強く実感した経験は、今も私の大切な指針となっています。

昭和基地のゼロエミッション達成に向けたクラウドBEMSの共同研究のイメージ



→ 計測データ → 「見える化」データ